173
297

特66
193

自序

題して日清戰爭壯士唄と云ふ記する處は日清激戰の有名なるものよ烈士の功名を顯はせし現況を寫し出せしものにして分ちて愉快節功名節の二種とす抑も是れを編せし趣旨は勇壯活潑の氣象を抱かし唄ひ出り唄ひ來るの間に不知不識元氣

を振はしめ敵愾心を起さしむるにあり江湖の諸君幸に一本を購讀せば益々志氣を興奮をる處あらん乎

甲午乙月のなかば　編者誌

日清戰爭壯士唄

（愉快節、名功節）

寒英居士編

野分のあと

「神兵の進み攻むる上の険あらん」

見すや前には激流の

後ろに巍々たる峯續き

「要害無比の平壌城

浪音高き大同江

大城山のかためある

是に壘を設けたる

清兵二万五六千
恃んで守れる臆病の
守りもいたゞ嚴かに
進み攻むるを破らんと
去れども魂腐敗せし
勇猛無類の大和魂
破るに何か難からん
旭日章旗を押し立てゝ
大島大迫立見等の

六

流石は名高き險阻をば
ちやん〳〵原に肖もやら
我日の本の軍隊の
「待か待たぬか待つならん
不規律未練の兵なれば
備へし御國の大丈夫が
隊伍整々堂々と
野津中將を始めとし
「將校四面より攻撃する

中にも名高いの玄武門
大同江の早瀬をば
類ひ稀なる軍功を
次第に砲聲轟きて
修羅の街をまのあたり
暫し勝負も見ねざるが
前面攻撃軍隊は
苦戰は諸手の第一の
さしもの激戰なりけれと

開いて向ふ原田氏
單身横ぎる川崎氏
「立てし勇士も數々ゞ
銃聲亂發敵味方
見る物すごく凄じく
大島少將率ひたる
最も激しく目冷しき
「處は何處牡丹台
屈せぬ兵士は殪れたる

屍を飛び越ゑ進み擊ち
ツギ〳〵取りし曉は
各軍隊もつゝがなく
劒火閃く間過ぎ
敵を敗りて諸共に
歡天喜地の折なれば
喜び謠ゑ祝しつゝ
目出度匂ふ菊月の
「靡く淨旗ぞ愉快なる

八

敵の第一第二壘
部署を定めし三面の
彈丸雨飛の中くゞり
刀向ふ清兵薙ぎ倒し
勇み勇みて乘り入れる
茲に何れも萬歲を
平壤城のあけの空
十六日の朝風に
勇壯じや勇壯じや

沖の白浪　其一

「双龍の玉を爭ふ黃海の沖
頃は長月十七の
日清海軍艦隊に
是れぞ世界の歷史上
「轟き傳ふ大勝利
艦隊中にて屈指なる
羽翼を張りて十二隻
味方は軍艦十一隻

午後の一時と覺ゑたり
端おく起る戰は
永く日本の名譽をば
敵は名に負ふ北洋の
定遠鎭遠始めとし
水雷六艘從へり
互に砲門開きつゝ

日清戰爭

巨砲を放つて奮戰し
硝烟天に漲りて
海上濛々咫尺さへ
雷擬ふ砲聲の
我艦隊は隊形を
敵は操縱運轉の
おゝて御國の海軍の
隊形亂れて來遠は
此の擊沈は水雷を

十

「激浪破りて突擊する
日光爲めに掩はれて
わかぬ間に轟くは
耳を劈く音なりき
終始變せず戰ふに
道に未熟の將校が
精鋭武勇に及ばんや
先づ第一に沈沒す
用ゐを破る二重底

壯士唄

是れゞ歐州各國に
「テルリン以來の稀有の功
敵艦數多打ち沈め
全勝己に見ゐけるは

其二

「國の爲め露と消ゐにし勇士の勳
斯くも激しき戰場に
末代薫る功績を
「一層目立つ其譽れ

はてるに足らん手柄にて
其外致遠超勇の
或は燬き立て追入擊し
「愉快の上の愉快なり

最と目冷しき働きし
立てしは赤城に西京と
坂本赤城艦長は

速力遲き小艦を宗遠鎮遠來遠を指揮突進の其中に殪れて最期遂げけるが軍人龜艦と祭られん素より一商船なれど泰山動かぬ膽略を操縱自在に敵艦を無念や舵機を壞られて

十二

前後左右に乘り廻し迎へ戰ひ轟擊し惜しや艦長敵丸に名は萬代に赫にくと是れに次きて西京は乘込む樺山中將が以て指揮する勇奮に目懸けて討ちし折もあれ暫し隊列外に向き

「猛然鎮遠定遠は敵は衝突恐れけん西京丸を避けけるが一度おらす二度も破裂の難を免れしは「武運を開く奇瑞かや針路を威海衛に取り日天西に春きて我艦隊は進擊し

間を突過し出でけるに左右にパット開展し同時に放たる水雷艇危機一髮の中を過ぎ神のめぐみか日の本の今は敵艦乱れ立ち逃れ出でしは黄昏の月さへ闇き海面を益々勢ひ振ひつゝ

十三

敵を挫ぎし擧動は

朝日の光

「萬邦に其名轟く堅固の守り
三砲台の其一と
是れゞ渤海灣口を
我が日の本の第二軍
渤海灣に乘り入れて
「蹴たて〳〵海上覇權占
數へられたる要害は
扼する旅順口なるが
是れを落して軍艦を
自由自在に白浪を
進み攻め行く陸軍の

十四

「勇壯絶快世界一
勝利じゃ大勝利

應援させんと霜月の
空を冒して旅順口
道なき道をたどりつ〳〵
敵も流石に平壤の
取りし試しもあるおれば
境と知れば卑怯なる
終末までも頑强の
向ふに先きなき旗風に
騎砲營練兵場の西の
二十一日東雲の
指して後ろの山間の
「堡壘攻擊着手せり
險阻を恃みて不覺をば
此處ころ生死存亡の
「ちやん〳〵坊主も死を決し
抵抗なせど神兵の
遂に敵兵支へ得ぞ
堡壘團ゞ落ちければ

十五

我が兵勢は百倍し
「進んで旅順に入にける
我手に歸して三十二の
海岸諸砲台までも
吁、我第二の軍隊よ
下士卒迄の功勞は
最早此地を占めぬれば
渤海灣は深くとも

十六

午の後かる二時頃に
黄金山の砲臺も
午前に全く旅順口
「皆悉く占領す
大山大將始とし
「偉大かるかな偉大かり
鎖鑰は茲に開けしぞ
「進め大丈夫北京迄
勇壯さや勇壯さや

◎功名節

赤城艦長の譽

「戰場に臨むは武士の絶大榮譽
世に隱れなき大孤山
龍虎の勢もて進み
是れぞ日清海戰に
此時味方の小艦と
去れど艦長は名の高き
ありと知られし坂元氏

沖の荒浪物とせず
互に挑み戰ふは
勝負爭ふ時ぞかし
敵侮りし赤城艦
海軍部内に其人の
繰る艦は小さくとも

十七

「君が膽略斗の如く
壓當なさん猛勢に
勇氣日頃に千倍し
戰鬪配置に就きけるが
二艦は正に右舷より
さま見られれば猶豫せず
去れど殘念至極には
我が艦隊に自ら
不知不識其内に

十八

既に黃海々面を
乘組む兵士も自ら
旗艦の指揮に從ひて
敵艦定遠鎭遠の
赤城を目懸けて砲擊の
「戰對砲擊力めたり
艦の速力遲き故
續き行く事能わねば
孤立の勢をおしたるは

「已を得さるの事ゆかし
來遠及び左翼なる
目懸けて突進したりしが
射擊は終に來遠を
「至らしめたる愉快さよ
艦長少佐も運命の
末代に揚げて軍人の
「爲めかや敵丸不幸にも
破碎の勢ひすさまじく

敵艦之に乘じてや
敵の諸艦は赤城艦
之れに對する猛烈の
艦橋上裡人なきに
斯くも偉功を顯はせし
盡くる處か勳を
名譽を後に歌はせん
我艦橋に中りけり
坂元少佐もあへなくも

「殪されたりし傷ましや
戰死の後まで指揮なせる
このいさはしと諸共に
青史に永くかゞやかん

玄武門の勇士

「水火をも避けぬ勇士の日本魂
此處は名高き平壤の
要害無類の玄武門
險阻に據りて築きたる
進み攻めたる我兵が
去れども君が勇名は
劍を真儘放たゞる
萬代不朽に萬國の
「青史に永くかゞやかん
功名じゃ功名せ

擊てども衝ども碎けぬに
生死を決し覺悟して
敵の打ち出す彈丸に
怨みは更らにおしとにて
「鉄門微塵になるまでと
折しもあれや一勇士
走り出せし程もおく
削るが如き絶壁を
むさゝび枝を走す如く
暫し憩ふて今一度
よしや一軍悉く
殪れて死すとも破れねば
火藥彈丸つゞくだけ
ハヤ進擊の準備なす
飛鳥の如く頭陣に
降り來る彈丸物とせど
宛然猿の木傳か
「難おく雲つく頂上に

攀ぢ上りたる勢は敵も味方もぼうせんと又もや茲に一勇士扶けて共に城壁の二人の影は敵陣に畿がる如きちやん〳〵を或は切り立て薙ぎ倒し揮ひて敵れ近寄ぬ間近にはせて金剛の

二十二

獅子奮進の如くなり暫し見詰めて居たりしか續いて前の大丈夫を「峻しき巖を乘り越ゑてわッて入りしが白雲の左よ右と両勇士「當るを幸ゑ日本刀隙をうかゞひ門の力を振ひ一喝の

聲諸共に引き拔けば力添へてや難もなく斯と見るより我兵は敵は大に避易し今は我手に玄武門此勇者をば誰となす共に闘するものにして三河の國の住人の後ゐる猛者は陸軍に

八百万の神々の門扉は左右に開きたり「怒りたけりて進け入る守りを捨てゝ逃げ去れば落ちて砦も落ちにけり豊橋十八聯隊に前きに進みし大丈夫は原田重吉其人ゞ「三村中尉と名も高し

二十三

斯く二勇士の功績は　聯隊中に照り添へる
啻夫れのみか彌增しに　「かゞやき渡らん五大洲
功名じや功名せ

日清戰爭壯士唄　終

明治廿七年十二月廿三日印刷
明治廿七年十二月三十日發行
著作者　東京神田區柳原河岸第十一號地　天野藝
發行者　東京日本橋區通三丁目十番地　野村銀次郎
印刷者　東京神田區柳原河岸第十一號地　龍雲堂大場沃美

特66
193

日清戦争 壮士唄

国立国会図書館

074405-000-6

特66-193

日清戦争壮士唄

寒英／編

M27

CEI-1657